**政治思想基礎　第九講　社会契約説のバリエーション　─ロックとルソー**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法学部　萩原能久

http://www.law.keio.ac.jp/~hagiwara/　　　　　　　　　　　　　　　　　　hagiwara@law.keio.ac.jp

**Ⅰ 社会契約論の基本構造**

自然状態→(自然法、全員が自然法というわけではない）→それでも存在する不都合→社会契約（どんな？）→政治社会（どんな？）

→自然状態が一番重要

→どういう状態なのかが一番重要

→なんらかのルールが存在している

→自然法、や規範

→自然状態にとどまることが重要ではない

→コモンウェルス→不都合を克服しなければならない

→国家→コモンウェルス→nation state近代国家ではない、無理がある

→政治社会というものが生み出される

→政治社会はどういう性格を持っているのか？？？

→同じようなロジック

→ホッブズ、リヴァイアサン

→第３部、第2部

ホッブズ(1588~1679) Leviathan 1651

ロック(1632~1704) Two Treatises of Government 1690

ルソー(1712~1778) Discours sur l'origine et les fondements de l'inegalite parmi les hommes 1755

　　　　　　　　　Du Contrat Social ou Principes du droit politique1762

→市民政府論→当時「市民」なんていたのか！？→統治二論になった

馬鹿げた理論

→ホッブズを念頭に置いている

→自説の年会を行なっている

→イギリスでは、正教徒革命が怒っている

→産業革命が起こる前のearly modernの時代

**Ⅱ 三つの社会契約論**

**自然状態**

H:　論理的フィクション：「万人の万人に対する戦争」

L:　歴史上の過去（アメリカ大陸）

ヨーロッパ文明社会－社会・権力関係：戦争状態の可能性も持つが平和な状態

R:　文明なき本能的動物の世界（人々は無知で言葉を話さず他者との交際もない）

　　戦争状態は社会状態においてのみ存在する。

→自然状態　→　ホッブズの時代のアメリカ大陸の状態が自然状態であると述べている

→自然法という共通ルールがない状態

→欧州の当時の状態がまさに一刻も命を争う状態

→派遣を競い合っている状態

→ホッブズの「万人の万人に対する戦争状態」

→国際政治理論家の意見がある

→ホッブズの「自然状態」を論理的フィクションとして述べていた

→歴史的過去、当時の欧州の状態がこの「自然状態」のキーとなったロックの自然状態　→　論理的フィクション　→　自然状態

→戦争もあるかもしれないが、、、、

→自然状態である →　ホッブズは自然状態は必ず戦争状態になる

ルソー　→　本能のままに生きる自然状態、他者との接触がなく、誰にも支持されない自由と平等

→　平和状態

→　人間は戦争したくない

→戦争は社会が生み出すもの

→社会状態になると初めて戦争は生み出されていく

→法的拘束も道徳的拘束も何もない

→完全な自由がほぼ万人に与えられている状態

**自然状態の自由・平等**

H:　平等な自然権（完全な自由）

L:　自然法の範囲内での拘束なき自由（身体、所有物の可処分）、差別なき相互的平等

R:　誰にも従わない自由と平等

**自己保存**

**→propertyの概念**

**→property →　他人に依存しない生活**

**→　本能的動物**

H:　希少財（定量で不足がちなパイ）の取り合い→「闘争」は対自然から対人間へ

→希少材、割り当てたもの

→全ての人間が戦争状態に、これを求めて

→しかし、自然の希少財は限られている

→他の動物の殺戮はなんの問題もないと欧州人の中にはあまりなかった

→闘争は自然から人間に向けられるようになった

→自己保存をするための自然法

→理性的な損得感情のもの

→死の恐怖

人間の感性によって生み出されるもの

L:　労働によるパイの拡大（所有権）→対自然

→資源が希少ではない

→獲物を捕ったりしている

→労働によるパイの拡大

→労働を投下することによって希少財を獲得するだけの能力があると人間にはされている

→理性的な要素がある

→自己保存

　　その制約要因（ロック的但し書き）①十分性条件　②浪費制限

R:　本能→理性‥‥自己保存・自愛amour de soi-meme

　　　　→感性‥‥憐憫の情pitié, commiseration

　　　　（感性的部分としての道徳←→Hobbes）

　　自愛amour de soi-meme → ＿＿＿＿自己完成能力＿＿＿＿perfectibilité  → 利己心amour propre → 私有財産

　　Lockeとは対称的な財産観

→本能のままに生きる人間

→同情心→他者に対する労わりの気持ち

→財産とは窃盗である

→財産権

→自分が労働を投下したもの

→財産観　→　言ったもの勝ち

→　自分のものだと主張するのは大事

→自然法の問題

→果たして、理性的発見されたものなのか

**Hobbes →　仮言命法、条件付き、「もし長生きしたいんだったら、〜を控えなさい」**

**→　勧告ないしアドバイスが全く拘束力を持たない人がいる**

**→一つの帰結**

**→自然法は神の命令として取らない限り、拘束力を持たない規範となってしまう**

**→平和→勧告は条件を受け入れた人のみのものとなる**

**→自然法は緩急を受け入れる**

**→本能の中には理性的部分と感性的部分がある**

**→理性→他者に対するもの**

**→所有権、慈愛をもたらす**

**→所有権をもたらす**

**→自然法→ルソーの中にはないが、人間の規範性を破壊する可能性がある、戦争状態になった場合**

**Kant →　定言命法、無条件で妥当、他人の嫌がることをしてはいけない**

**自然法**

H:　理性的推論の帰結（神の命令） 「勧告」としての「平和」

L:　人間の相互関係から生まれる個人に内面化された規範

私自身が、自分に破壊の脅威を与える者を滅ぼす権利をもつことは合理的であり、正当である。なぜなら、基本的な自然法によって可能な限り人は保存されなければならないが、もしすべての人間を保存することができない場合には、まず罪のない者の安全が優先されるべきであるからである。　『統治二論』後篇第三章一六節

R:　人間の生まれ持った本能（amour de soi-memeとpitié)が自然法の役割

**自然状態の不都合**

H:　自己保存が逆に自らの安全と平和を危うくするというパラドックス

→自己保存を行おうとした結果、戦争状態になり、安全と平和を自ら破壊するような逆説的状況が生まれてしまう

→自然状態　→　至福の状態

→フェリシティとmiseryが同居している

L:　自愛が故の偏向（法・裁判官の不在）、正しい判断も実現されない（執行者の不在）→所有権の不安定

→自分で自分のことを判断することをしている

→自然状態において、万人がその各々の万人裁判官状態

→自分のことを自分が騒ぐ

→自分に甘く他人に厳しい

→裁判官としての偏りが生じてしまう

→裁判官も私人と私人の間でぶつかり合いが生まれてしまう。

→両方が自分が正しいいとしてしまう

→自分→所有権の不安定が生じていしまう

R:　 人間は自由なものとして生まれた、しかもいたるところで鎖につながれている。（『社会契約論』第一編第一章）

ある土地を囲い込んで「この土地は私のものだ」と言うことを思いつき、そのことを信じる単純な人々を見いだした最初の者が市民社会の創設者である。（『人間不平等起源論』第二部）

→人間は自由なものとして生まれた、しかもいたるところで鎖に繋がれている

→自由を創出状態に陥ってしまう

→この土地は私のものだと言ってしまう

→自分が誰も言わない

→言い放ったもの　→　人間は生まれながらにして平等になっている

→こういうインコンビニエンスがあるからと言い出す奴が不可避的にでてくる

ルソーの考え方が出てくる

→自然法には拘束力がないが故に出てくる

→単なる言葉なので自然法には逆らいやすい

→実効性を伴わない

→単なる言葉にすぎない

→自然状態においては誰もが自然状態の裁判官

→私人同士の間の紛争を言っている

→紛争調停社としてのもの

→理性的な要因、感性的要因が出てくる

→国家設立へ、、、、、、、

**国家設立**

H:　「剣を伴わぬ契約は単なる言葉に過ぎない」‥‥権力による国家設立（これも実は単なる言葉）

L:　紛争調停者（公正な第三者）

R:　文明的野蛮への「退行的」進歩

**放棄されるもの**

H:　自然権の一部（政治的自由）

L:　natural power（自力救済＝万人処罰権）

R:　「一身とすべての力」 、自然的自由≒Hobbesの「自然権」

→「彼が気を惹かれ、手に入れたいと思った物ならなんでも手に入れることができる無制限の権利」

→Hと極めて近い、無制限の権利ととても近い

**契約の相手**

H:　主権者（彼と臣民は契約関係にない。主権者は権利のみを持つ）

L:　自然人→契約(contract)→「共同社会」→信託(trust)→立法権力（その下に執行と連合）＝統治者

　　統治者は義務のみを持つ

→trustの結果として、そいう義務を負う

→抵抗する権利がある

R:　自分自身を不可分の構成員とする共同体

　　（支配者（公民）citoyenと被服従者（臣民）sujetの同一性）

→一人がなんらかに属している状態　→　契約の状態

→ルソー→その共同体はまだ存在していない

→服従者になる

**国家の本質**

H:　罰を与える暴力装置（「活動空間」としての国家。そこでは人間は他者に対して依然として狼）

→人間は「狼」であるという前提

→何をしても良いという状態

→人間が生を営むことができるという空間

→特殊意思　→　慈愛が生み出す特殊意思

→共同体固有の意思

→自分が作った命令

→それこそが自由

→ホッブズ的な意味での自然権

→一般意志

→自分意思の個別意思

→自分自身が不可欠の個別意思

L:　国民の義務意識・所有権保全を目的とする絶対的権力

R:　一般意志volonté génénraleの支配

　（特殊意志particulièreでもその総和である全体意志volonté de tousでもない）

　　法への服従＝自由（放棄したものが自分に回帰）

　　代議制（議会主義）の否定と道徳的共同体としての国家（「存在空間」としての国家）

ルソーの政治はいかなる意味においても契約主義ではない。彼が社会契約と呼ぶものは交換よりも道徳的転換を表している。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　M.ウォルツアー

→共同体→道徳的転換が起きる

→社会契約

**抵抗権　→　憲法論、圧政に対する抵抗権**

**→社会に生み出す抵抗権**

**→真の基本**

**→これによって革命が起きて国家が形成されていく**

抵抗権とは何か

個人の抵抗権は「真の基本権に欠くことのできないもの」であるが、それは「最後の保護手段であり、譲渡しえない、しかも組織化することのできない権利であり」、「国家内での基礎を断じてもちえない」。　　　　　C.シュミット

H:　コモンウエルスに持ち越された「自然権」

　　「逃亡」のみ

L:　Appeal to Heavenとしての革命権

R:　ありえない（祖国のために死ぬことこそ最高の美徳）

社会契約は、契約当事者の保存を目的とする。目的を欲するものはまた手段をも欲する。そしてこれらの手段はいくらかの危 険、さらには若干の損害と切り離しえない。他人の犠牲において自分の生命を保存しようとする人は、必要な場合には、また他人のためにその生命を投げ出さね ばならない。そして統治者が市民に向かって「お前の死ぬことが国家の役に立つのだ」というとき、市民は死なねばならない。なぜなら、この条例によってのみ 彼は今日まで安全に生きてきたのであり、また彼の生命は単に自然の恵みだけではもはやなく、国家からの条件つきの贈物なのだから。

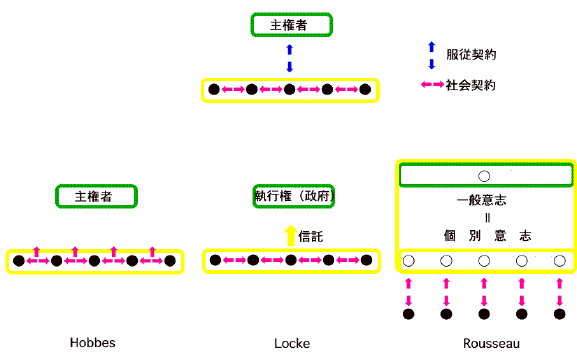
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　『社会契約論』第二編第五章

→一人一人の人間が国家権力と戦っている

→悪しき統治者を成敗する

→appeal to heaven

**契約説のアポリア**



1)　政治社会の成立の論理的説明‥‥「社会契約」

2)　政治社会の正統性根拠の説明‥‥「服従契約」

→相手を信頼して裏切られる

→服従契約

→暴君放伐論者

→革命的転覆が日常茶飯事になってしまう

→ホッブズの社会契約

→ロックの場合、

→義務を負うが、不可罰

H:　2)を1)にとりこみ同時に行う

（その結果主権者は契約当事者とならず、義務を負わない）

L:　1)を契約説で説明し、

2)は執行権への人民の信託（≠契約‥‥義務負うが不可罰）

R:　1)、2)同時だが

2)を1)の段階でまだ存在しない「共同体」との契約として行う

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*参考文献\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

ジョン・ロック『完訳　統治二論』、岩波文庫

ジャン=ジャック・ルソー『人間不平等起源論』、岩波文庫

ジャン=ジャック・ルソー『社会契約論』、岩波文庫

マイケル・ウォルツァー『義務に関する１１の試論』、而立社

樋口陽一『近代立憲主義と現代国家』、剄草書房

カール・シュミット『憲法論』、みすず書房

カール・シュミット『合法性と正当性』、未來社

P.C.マイヤー=タッシュ『ホッブズと抵抗権』木鐸社